

とうかいどうよつやかいだん 東海道四谷怪談

〔解説〕

文政八年（一八二五）七月、江戸中村座で上演された、鶴屋南北の傑作「東海道四谷怪談」を浄瑠璃に仕立てたもの。江戸、四谷左門町に住んでいた田宮伊右衛門と妻のお岩の伝説を、「仮名手本忠臣蔵」の外伝という体裁で描いています。歌舞伎では、お岩を三代目尾上菊五郎、伊右衛門を七代目市川団十郎が演じ、当時、江戸中の人気をさらうほどの大ヒットとなりました。浄瑠璃化の初演は、天保二年（一八三一）七月、御霊境内の操り芝居で、作者は不明ですが、南北の作とは構成に大きな相違がありました。

〔伊右衛門住家の段 あらすじ〕

持病の逆上（のぼせ）で苦しんでいた於岩は、水庵からもらった薬を飲んでいきます。（お岩に横恋慕している権平が忍び込んできて、お岩に冷たくあしらわれると、お岩の夫・伊右衛門が奥村の娘・小梅と深い仲になっており、水庵と謀ってお岩に毒薬を与えていることを告げます。）

外出していた奉公人の小助が、お岩夫婦の息子・伊之助を連れて帰ってきて、髪が抜け、顔も腫れ上がって醜くなったお岩を見て驚愕します。お岩も、自分が伊右衛門らに騙されていたことに気づきます。そこへ伊右衛門が帰宅し、怒りと嫉妬に狂うお岩に、小助と密通したとの罪をなすりつけ、二人を斬ってしまいます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

伊右衛門住家の段

さして出でて行く。

既にその日も入相の、鐘かうかうと告げ渡り、まがきにすだく虫の音も、いとど淋しき留守の宿。

お岩はすめぬ案じ顔、いつか晴なん胸の闇、行燈取り出し火打ち箱、移す附け木の硫黄さへ、花なき夫の心根を、とやかう思ふ女気の、一人くよくよかこち言。

「ホンニ浮世と云ひながら、水の流れと人の行く末、元この身は塩谷家の奥勤め、縁でかな伊右衛門殿に思はれて、お暇願うて嫁入りの、間もなう産んだあの伊之助、主の世継ぎと楽しんで、育つる甲斐も情ない。生まれ落ちると疝の虫、我が身は産の悩みより血の道と云ふ立ち病ひ、其上俄か

にお家の騒動。思ひもよらぬ浪々に、尾羽打ち枯らす今の身の上。よくよく武運に尽き果てし、親子夫婦が身の上」

と、浮世を恨み身を託ち、そぞろ涙にくれけるが、思ひ蓄じて血の道の、逆上に思はずよろ／＼

「ア、また持病のこの逆上。どうぞ仕様はオ、ソレ／＼、最善水庵殿が下されし、加減の粉葉、幸い」

と、白湯にかき立て二口三口、飲むは毒とも神ならぬ、身の成る果てぞ哀れなり。

跡にお岩はせきのぼす、胸の炎をおししずめ、

「オ、そうぢや、ぼんの戻らぬその内に髪なとといておきましょ」

と、有合ふ鏡台引出し、かかる千筋の後れ髪、コハ心得ずとまた取り上げ、解く程抜ける額髪両手

に丸めて打眺め、

「ハテ合点の行かぬ今日に限つてのぼせの強さ、殊更髪はこの様に抜けるは病の業なるか」

と、言ひつゝ鏡の蓋取退け、向かへば写る怪しき顔、はつとびつくり立ち退いて、見れども辺りに人もなし、ハテ不思議なと立ち寄つて、また差向かふ鏡の影よく／＼眺めて、ヤア／＼／＼いつの間此顔が、この様に変はつたぞと、云ひつゝ我と我が顔をためつすがめつ目を留めて、見れば見るほど悪女の相好、ハアとばかりにどうと伏し、コハ何とせん悲しやと、狂気の如く立つ居つ、身悶えすれば胸先へ、持病のつかへが差込んで、そのままそこへ伏しまろび悶え苦しむ折からに、かかる事とはつゆ知らず、泣く子をすかして漸うと、帰る小助が門の口、

「奥様さぞお待ちかね、何がモウ坊様がやんちゃばかり、四谷中をあちこちと、すかし廻つて漸う

只今、ソレちやつと添乳をなされませと、言ひ

つゝ立ち寄りこれはさて、御病中に大胆千万、宵寝惑ひのおうたたね。エ、ちとお嗜みなされませ」

と、傍へに稚子そつと置き、見れば苦痛の其有様。

「ヤア是はしたり、また例のお癩が起こつたか、奥様申し／＼エ、かてゝ加へて旦那はお留守、コリヤマアどうせう、何とせん」

かたへに有り合ふ土瓶のぬるみ、口押し分けて一口飲ませ、そのまま耳に口差し寄せ、

「奥様、奥様いなう、お岩様いなう」

と、背撫でさすり様々と心を砕く介抱に、お岩は漸う息吹返し

「ハア。オ、小助か戻りやつたか、さうして坊は

どこに居やる」

「イヤモお氣遣ひなされますな、どうやらかうやら叩き付け、只今漸う寝かしましてごわりまする」

「オ、それはマアく嬉しう(喜ぶ)」

「ア、イヤ申し奥様、それはさうとお前様は、いつのまに其様おつとろしいお顔にはならしやりましたぞいの」

「さればいの、いつもの通り伊右衛門殿、八幡宮へ参詣と、出て行かしやつたその後で、あんまりのぼせが強い故、水庵殿の加減の粉薬、二口三口飲みし所へ、直助の権平が裏から忍んで横恋慕、様々口説くその中にも、伊右衛門殿は奥村の娘に深う云ひ交はし、わしに愛想を尽かさうと、相好変へる薬まで整へしとは聞いたれども、よもや夫

がその様な非道な事はあるまいと、心で心取り直せど、のぼせは次第に強うなり、髪をすけば抜け落ちる、あまつさへ此顔の俄かに変はりし我が相好、ム、さては権平が詞に違はず、奥村親子が工みにて水庵に言ひ含め、毒薬を飲ませしよな、おのれそのまま置くべきか」

と、すつくと立つて表の方、駆け出さん其勢ひ、小助は慌てて抱き止め、

「コレ申し奥様、ソリヤ悪い御了見、権平が詞を信じ、奥村へござつても、先に覚えのない時は、こなたばかりか旦那の恥、サますまずお心をとつくりとお鎮めなされて下さりませ」

「イヤく恥にならうが笑はれうが、モウかうなつた上からは姫御前の嗜みも、色を花香も捨たつたわいなう、サアとめずと放しや、そこ退きや」

と、互ひに争う帯の端、繻子のしやら解け因果のはし、挑み争ふ、折こそあれ。戻りかかりし羽宮伊右衛門、何心なく我が家の内、這入るも知らぬ兩人が思はずばつたり行き当たり、互ひに見合す顔と顔。

「ホこれはお旦那お早いお帰り」

とその場の首尾の手持ちなく、小助はもぢく控え居る、お岩は夫の胸倉にしがみ付いて

「コレ伊右衛門殿、ようもくわしを騙し、毎夜

くぬつけりと小梅と枕を交わしやつたなう」

と云ふも嫉妬のうわがれ声、角目立つたる形相に、驚きながらさあらぬ体、

「ム、合点の行かぬこの場の様子、ガマそれは格別、その方が面体は何故にその様に見苦しくは変ぜしぞ」

「何故、何故とは、エ、白々しいわいの、コレこの様に生まれも付かぬ片輪にしたも、皆こなさんの心から、サア元の顔にして返しや」

と、取りつき嘆くを取て突き退け、

「ヤア言はしておけば様々な戯言、おのれ等こそ身が留守に帯紐解いて不義密通、主の目を抜く不忠者、成敗の重ね斬り、覚悟ひろげ」

と難題を、聞くより小助は律儀一遍、涙と共に膝突きかけ、

「コレ旦那様、イヤコレ伊右衛門殿、この小助を不義者とは、ソリヤこなた無理だく、あんまりでござりますわいの。ホンニこの年月こなた様を

世に出さうと、おらがこれ、このさまを見さつしやれ、盆も正月もコレ一点、日がな一日、町小遣いに駆け歩き、犬に吠えられ夜廻りの、お役人に

はエ、見咎められ、憂き艱難はいく何度、夜の目も碌に寝たことは、今の今迄ごはりませぬわいなう。それに気強い今のお詞、エ、聞こえませぬ旦那殿」

と、畳叩いて恨み泣き。お岩も共に咳上げく

「上は女御お后より、賤しき賤の下々でも、連れ添ふ夫を大切に思ふは女の道なれど、お前に貧苦を見せまいと、濯ぎ洗いの賃仕事、心を砕く女房を、捨てて日陰のます花に、移り変わるのみならず、覚えのない身に疑いは、日頃の気質に似合ひませぬ、むごいわいな」

とばかりにて、恨みのたけを夕闇の、雲に篠つく村時雨、晴れ間は更に泣くばかり。伊右衛門は耳にもかけず

「ヤア曲にも立たぬ世迷言、念仏申して成仏せよ、

南無阿弥陀仏」

と兩人を、なぶり殺しに七転八倒、無慚といふも哀れるなる。かかるところへ表口、息を切つて駆け来る水庵

「コレく伊右衛門殿、お岩殿の相好を変へた薬は我らが秘薬、皆奥村の母御の頼み、気の毒ながらお内儀を、手につけられしはもつけの幸い、サアこれからは天井抜け、小梅殿とン盃事、誰憚らぬ三国一婿に成り済ました、しやんくくく、えへへ、オホホ、ハ、ハ、サアく早う」

とせき立つる、夫も今更後悔の詮方涙押包み、

「現在女房子家来まで、不憫ながらも手にかけても定まる過去の因縁事、しかし後難の恐れあれば、本意ならねど兩人の死骸をば、納戸の戸板に打ち付けて、不義密通と書き記して、根無川へ押し流

さん。こゝは端近奥の間で用意よくば裏道から、
早う〜」

に

「実に尤も、幸い隣の団助を」

と、表へ出て隣の戸口そつと覗いて声ひそめ

「団助〜〜」

に、出てくる団助、水庵差し寄り耳に口、

「ナア」

「ウン」

「ナア」

「ウン」

頷き囁き両人は、二人の死骸を引つかたげ奥の間
さして入りにけり。最前より始終その様子、窺ひ
聞いたる直助権平、物陰より現れ出で、

「ヤア、科なき女房家来まで成敗の羽宮伊右衛門、

代官所へ注進」

と、駆け出す帯際引き戻し、

「ヤアどこへ〜、大事を聞いたは汝が寂滅、覚

悟ひろげ」

と斬付くる。こなたも我武者のだんびら物、二打
ち三打ち戦ふ中、手練の羽宮に斬立てられ、逃ぐ
るをばつさり後袈裟。

「イデこの上は我が子の死骸、せめて人目を包ま

ん」

と、幸い片方に有合わす石を重りの水葬礼、

「南無阿弥陀仏」

と井筒の中、打込む間もアラ不思議や、俄に家鳴
り振動して、いづくよりかはあまたの鼠、

「コハ心得ず」

とためらふ中、伊右衛門目掛け飛び掛かるを

「シヤ面倒な」

と斬払ふ、刀は稲妻、燃え立つ陰火、数は二つか
三ども廻る報いは末の世に、残れる四谷怪談の
因縁かくと知られけり。